

ある文献学の「殉教者」の肖像： ヨーハン・ヤーコプ・ライスケ『自伝』の翻訳と研究 (1)

稲垣 健太郎

1. はじめに

1786年に出版された『東洋ならびに積義に関する新叢書 (*Neue Orientalische und Exegetische Bibliothek*)』の第一巻において、ゲッティンゲン大学東洋語教授ヨーハン・ダーフィット・ミヒャエーリス (Johann David Michaelis, 1717-1791) は、先立つこと1783年にライプツィヒで出版されたとあるドイツ語の書籍の書評を発表した¹。ミヒャエーリスは、自身の健康上の不調の故に書評の発表が遅れたことを弁明しつつ、この書籍の著者の重要性のため、そしてこの書籍が自らにかかわる誹りを訂正するべく、書評をしたためたことを明かしている²。

ミヒャエーリスが書評の対象とした書籍とは、18世紀のドイツ語圏におけるアラビア学の創始者として記憶されるヨーハン・ヤーコプ・ライスケ (Johann Jacob Reiske, 1716-1774) の自伝的著作である。『ヨーハン・ヤーコプ・ライスケ博士自身によって著された自伝』(以下、本翻訳では『自伝』と省略)と題された本書は、ライスケの没後、彼の夫人エルネスティーネ・クリスティーネ・ライスケ (Ernestine Christine Reiske, 1735-1798) によって編集された³。

本翻訳—並びに本稿に続く諸論考—は、ライスケの『自伝』を邦訳した上で、その理解の助けとなるような学問史・文化史・社会史的な注釈を提出するものである。それによって本翻訳は、ライスケにかんする研究の基礎をなす自伝的情報を日本語で提示することを目的とする。

しかし『自伝』の翻訳と研究に先立って、ライスケの生涯と仕事を研究す

¹ Johann David Michaelis, *Neue Orientalische und Exegetische Bibliothek*. Erster Theil (Göttingen: Verlag der Wittme Vandenhoeck, 1786), 131-160. ミヒャエーリスにつき、Jonathan Sheehan, *The Enlightenment Bible. Translation, Scholarship, Culture* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2005); Michael Legaspi, *The Death of Scripture and the Rise of Biblical Studies* (Oxford: Oxford University Press, 2010); Kristine Palmieri, 'Philology Betwixt and Between: Johann David Michaelis and His British Interlocutors', *Erudition and the Republic of Letters*, 10/1 (2025), 25-87.

² Michaelis, *Neue orientalische und Exegetische Bibliothek*, 1: 131. 'Wirklich zu spät zeige ich dis [sic] Buch an, das mir erst spät zu Gesichte gekommen ist, weil ich in der Zeit, da es hier erschien, tödlich krank war, und meine Krankheit sehr lange anhielt. Uebergangen [sic] kann es indessen nicht werden, theils weil Reiske in der Arabischen Literatur ein sehr wichtiger Mann ist, theils wegen einer mich betreffenden Anklage, die ich als eingestehend angesehen werden könnte, wenn ich nichts davon sagte. Was ich dabey nachzutragen habe, ist ein wirklicher Zusaz [sic] zu Reiskens Leben.'

³ D. Johann Jacob Reiskens von ihm selbst aufgesetzte Lebensbeschreibung (Leipzig: in der Buchhandlung der Gelehrten, 1783).

ることの意義を、研究史を振り返りながら説明する必要があるように思われる。18世紀ドイツを代表する知識人たち、例えばカント (Immanuel Kant, 1724-1804) やレッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) とは異なり、ライスケはこんにちでは忘れ去られた数多くの学者たちの一人である。とはいえ、同時代のより巨視的な人類史叙述、例えばヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) の『人類歴史哲学考 (*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*)』を紐解くと、ライスケの名は文字通り脚注に埋もれつつも、しかし彼が同時代人によって高く評価されていることが明らかとなる。イスラームの成立やヨーロッパ文化に対するアラブ文化の影響を扱う『人類歴史哲学考』第4部第19巻において、ヘルダーはイスラーム教徒の年代記や地誌に言及する。こうした著作の有益さにもかかわらず、「これらの報告の大部分はまだ利用されていなかったり、隠れたままになっている」⁴。この文脈において、ヘルダーはライスケの名を挙げる。「われわれのライスケは、自らのアラビア語とギリシア語への情熱の殉教者となった。彼の遺骨が安らかに眠ることを祈る。しかし非難された彼の学識を、われわれはこれからもずっと、絶対に取り戻すことはできないのだ」⁵。

ライスケを論究することの意義のひとつは、ヘルダーが「非難された彼の学識」と述べたところと関わる。『自伝』に含まれる情報は、ライスケがアラビア語文献学のみならず、ギリシア語文献学の分野においていかなる功績を残したのか、さらには、彼の学問的営みをどのような学問史的・社会史的な文脈に位置付けることができるのか、を知るために不可欠である。それ故にこの翻訳と注釈は、文献学者ライスケの仕事を論じるための準備のひとつをなす。

これまでライスケは、18世紀半ばのドイツ語圏におけるアラビア学 (Arabistik) の創始者として記憶されてきた⁶。盛期中世から20世紀半ばまでのヨーロッパにおけるアラビア学の発展の見通しを与えたヨーハン・フュック (Johann Fück, 1894-1974) は、ライスケこそ「アラビア語文献学を独立した学問の次元に引き上げた」という評価を与えた⁷。ライスケに対するかかる評価は、フュックの後に提出された研究の方向を定めることとなった。17世紀のイ

⁴ ヘルダー著、嶋田洋一郎訳『人類歴史哲学考』全5巻 (岩波文庫、2023-2024年)、第5巻、175頁。

⁵ Ibid.

⁶ 以下、ライスケにかんする研究史と訳者の問題意識は、Jan Loop, s.v. 'Johann Jacob Reiske', in David Thomas and John Chesworth, eds., *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History. Volume 14. Central and Eastern Europe (1700-1800)* (Leiden and Boston: Brill, 2020), 192-209に強く影響を受けている。

⁷ Johann Fück, *Die arabischen Studien in Europa bis in den Anfang des 20. Jahrhunderts* (Leipzig: Otto Harrassowitz, 1955), 122 (=ヨーハン・フュック著、井村行子訳『アラブ・イスラーム研究誌：20世紀初頭までのヨーロッパにおける』(法政大学出版局、2002年)、101頁)。

ングランドにおいてアラビア学に寄与した東洋学者たちを論じたジェラルド・トーマーによる浩瀚な著作もまた、ライスケが「アラビア語文献をそれ自体として理解する」ことを追求したと指摘した。18世紀半ばのヨーロッパにおいて支配的であった立場、すなわち、ヘブライ語聖書や古代イスラエルの慣習を理解するべく、アラビア語を神学の婢女として用いるという態度に異議を唱えた学者として、ライスケが記憶されているのである⁸。

ドイツ語圏におけるアラビア学の創始者という評価—あるいはライスケ自身の戦略的なイメージ形成—は、東洋学の歴史に関心を寄せる学者たちにとり、ライスケの学問的功績を研究する契機となった。じっさい、フックやトーマーの仕事を受けて、ライスケの多様な学問的関心にかんする研究が提出されてきた。ライスケのアラビア語詩に対する関心や彼がライデン大学において師事したアルベルト・スホルテンス (Albert Schultens, 1686-1750) との鋭い対立⁹やライスケの古銭学 (Numismatik) への貢献¹⁰、またアル=マイダーニー (Aḥmad b. Muḥammad al-Maydānī, d. 1124) の『金言集 (Mağma' al-amtāl)』を出版するというライスケの未完の目論見¹¹など、アラビア学におけるライスケの功績が論じられてきたのである。

加えて近年では、オランダやドイツ、デンマークの図書館に所蔵されるライスケの遺稿群 (Nachlass) が用いられるようになることで、ライスケの学問的実践にさらなる光が当てられつつある。わけてもコペンハーゲンに所在するデンマーク王立図書館は、ライデン大学での学生時代にライスケが筆写したアラビア語写本のみならず、これらの写本のラテン語訳やドイツ語訳、写本への索引、さらにはライスケが所有した刊本を所蔵している¹²。これらの史料群を

⁸ Gerald J. Toomer, *Eastern Wisdom and Learning. The Study of Arabic in Seventeenth-Century England* (Oxford: Clarendon Press, 1996), 313.

⁹ Jan Loop, 'Kontroverse Bemühungen um den Orient: Johann Jacob Reiske und die deutsche Orientalistik seiner Zeit', in Hans-Georg Ebert and Thoralf Hanstein, eds., *Johann Jacob Reiske—Leben und Wirkung. Ein Leipziger Byzantinist und Begründer der Orientalistik im 18. Jahrhundert* (Leipzig: Evangelischer Verlagsanstalt, 2005), 45-85.

¹⁰ Stefan Heidemann, 'Die Entwicklung der Methoden in der Islamischen Numismatik im 18. Jahrhundert—War Johann Jacob Reiske ihr Begründer?', in Ebert and Hanstein, eds., *Johann Jacob Reiske*, 147-202.

¹¹ Arnold Vrolijk, "Entirely free from the urge to publish": H. A. Schultens, J. J. Reiske, E. Scheidius and the 18th-Century Attempts at an Edition of the Arabic Proverbs of al-Maydānī, in Stefanie Brinkmann and Beate Wiesmüller, eds., *From Codicology to Technology: Islamic Manuscripts and their Place in Scholarship*, 2. durchgesehene Auflage (Berlin: Frank & Timme, 2012), 59-80. フローライクは、デフェンターの市立文書館ならびにアテナエウム図書館 (Deventer, Stadsarchief en Athenaeumbibliotheek) に10 O 11として所蔵される、ライスケの手になる『金言集』の写本に言及している (Vrolijk, "Entirely free from the urge to publish", 61)。

¹² デンマーク王立図書館におけるライスケの写本コレクションにつき、Stig T. Rasmussen, *De Orientaliske Samlinger / The Oriental Collections* (Copenhagen: Det Kongelige Bibliotek, 2016), 417-423 (English translation at 425-431).

用いることで、ライスケが17世紀末フランスの東洋学者デルプロ (Barthélemy d'Herbelot, 1625-1695) によって作成された、東洋にかんする百科事典『東洋全書 (*Bibliothèque Orientale*)』をどのように読み、用いたのか¹³、ライスケがアラビア語写本を読み進めるなかで、写本同士の相互参照 (cross-reference) や索引 (index) を作成することで、アラビア語の語彙のみならず、「イスラーム世界」の文化や学問、政治の歴史にかんする情報を整理・管理していたこと¹⁴、またライスケが17世紀オスマン帝国を代表する博学者であったキヤーティプ・チェレビ (Kātip Çelebi, d. 1657) の手になるペルシア語の年代記『歴史の暦 (*Takvīm al-tavārīh*)』をいかなる動機からどのように読んだのか、が明らかとなった¹⁵。

ヘルダーがアラビア語と並んでライスケの功績として数えた古典ギリシア語についていえば、コンラート・ブルジアン (Conrad Bursian, 1830-1883) の手になる『ドイツにおける古典文献学の歴史』がライスケの仕事の見通しを与えてくれる¹⁶。ビザンツ皇帝コンスタンティノス七世ボルフェロゲネトス (d. 959) の『ビザンツ宮廷におけるしきたりについての二巻 (*Libri duo de Cerimoniis avlae Byzantinae*)』のギリシア語テキストとラテン語訳をはじめ¹⁷、ライスケは数多くのギリシア語の古典を編集したことで知られている¹⁸。

他方、管見の限り、デンマーク王立図書館に所蔵されるライスケのギリシア・ラテン語にかんする遺稿や、彼が所有した刊本に注目し、それらを網羅的に分析する研究は提出されていないように思われる。これらの史料群は、相互参照や索引の作成など、ライスケの学問的実践を理解するために重要であるの

¹³ Alexander Bevilacqua, 'How to Organise the Orient. D'Herbelot and the *Bibliothèque Orientale*', *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 79 (2016), 213-261. ライスケが所有した『東洋全書』のコピーは、København, Det kongelige bibliotek (henceforth: KKB), KPS. 24として保管されている。

¹⁴ Paul Babinski, 'World Literature in Practice. The Orientalists' Manuscript between the Ottoman Empire and Germany', PhD diss., Princeton University, 2020, 329-355.

¹⁵ 稲垣健太郎「イスラーム史を学ぶこと：ヨーハン・ヤーコプ・ライスケとイスラーム史叙述」小谷英生、網谷壮介、飯田賢穂、上村剛 (編)『歴史を書くとはどういうことか 初期近代ヨーロッパの歴史叙述』(勁草書房、2023年)、151-175頁。

¹⁶ Conrad Bursian, *Geschichte der klassischen Philologie in Deutschland von den Anfängen bis zur Gegenwart*, erste Hälfte (Munich and Leipzig: R. Oldenbourg, 1883), 407-416. 本翻訳の訳者は、ブルジアンの著作を Loop, 'Johann Jacob Reiske', 192での言及を通じて知ることができた。より近年に発表された、ギリシア語文献学者としてのライスケを扱った研究として、Sebastian Kolditz, 'Johann Jacob Reiske und die byzantinischen Studien', in Ebert and Hanstein, eds., *Johann Jacob Reiske*, 87-116.

¹⁷ Johann Jacob Reiske, ed., *Constantini Porphyrogenenti Imperatoris Constantinopolitani Libri duo de Cerimoniis avlae Byzantinae*, 2 vols (Leipzig: Ex officina Libraria Ioannis Friderici Gleditschil, 1751-1754).

¹⁸ E.g., Joannis Jacobi Reiske ed., *Animadversionum ad Graecos auctores*, 5 vols (Leipzig: Loeper, 1757-1766).

みならず、ライスケという一人の学者が、アラビア語文献学とギリシア語文献学というふたつの分野にまたがって活動したことの学問史的な意義を考える好個の材料を提供する¹⁹。ライスケがアラビア語文献学とギリシア語文献学という両分野において活動したことの意義は、ベン＝トヴによってより鋭く指摘された²⁰。ベン＝トヴの主眼は、ヘルムシュテット大学の教授ラーケマッハー (Johann Gottfried Lakemacher, 1695-1736) の仕事を分析することで、アラビア語文献学とギリシア語文献学という両分野のつながりが、初期近代ヨーロッパにおいて特異なものでは決してなかったことを示すことにある。かかる学者の事例のひとつとして、ライスケが言及されているのである。

ライスケにおけるアラビア語文献学とギリシア語文献学のつながりを論じるための視座のひとつは、バビンスキーによって提示されている。バビンスキーは、自身がライスケのギリシア語関連史料を考慮していないことを認めつつ、「ライスケが自身の学問的実践におけるより明白な手本をギリシア語の学者たちのあいだで有していた²¹」可能性を指摘した。たとえばライスケは、アレクサンドリアのヘシュキオスに帰される『ギリシア語辞典』のみならず²²、ライデン大学のアラビア語教授ヤコブス・ゴリウス (Jacobus Golius, 1596-1667) の手になる『アラビア語・ラテン語辞典』を所有していた²³。ライスケが所有したそれぞれのコピーの欄外は、膨大な書き込みによって埋め尽くされている。これらの書き込みの内容や性質を比較することで、ライスケによるギリシア語の学習とアラビア語の学習が、その方法において、いかなる共通点や相違点を有したのか、を部分的にはあれ明らかにすることができよう。『自伝』は、以上の学問的実践にかかる論点を扱うための前提となる情報を含む。『自伝』を通じて読者は、ライスケが学んできたギリシア語文献や、アムステルダムのギムナジウム教授ドルヴィユ (Jacques Philippe D'Orville, 1696-1751) といった古典文献学者たちと彼がどのような交流を得たのかを知ることができる。

¹⁹ ライスケにおけるアラビア語文献学とギリシア語文献学のつながりを指摘した研究として、Gotthard Strohmaier, 'Johann Jacob Reiske—Byzantinist und Arabist der Aufklärung', *Klio: Beiträge zur Alten Geschichte*, 58/1 (1976), 199-209.

²⁰ Asaph Ben-Tov, 'Hellenism in the Context of Oriental Studies: The Case of Johann Gottfried Lakemacher (1695-1736)', *Int Class Trad*, 25/3 (2018), 297-314. ローブもまた、Ben-Tov, 'Hellenism' を参照しつつ、ギリシア語文献学者としてのライスケの重要性を指摘する (Loop, 'Johan Jacob Reiske', 192; 199)。

²¹ Babinski, 'World Literature in Practice', 337, n. 202.

²² KKB, NKS 45 2o. 本コピーの書誌情報につき、https://soeg.kb.dk/permalink/45KBDK_KGL/1pioq0f/alma99121999190905763 (最終閲覧日：2025年9月29日)。

²³ Jacobus Golius, *Lexicon Arabico-Latinum* (Leiden: Typis Bonaventurae & Abrahami Elseviriorum, 1653; København, Det Kongelige Bibliotek, 17, 212 00633. 本コピーの書誌情報につき、https://soeg.kb.dk/permalink/45KBDK_KGL/1pioq0f/alma99122908848705763 (最終閲覧日：2025年9月29日)。

とはいえ、『自伝』は取り扱いに注意を要する史料でもある。例えば、『自伝』を通じて示される「アラビア語文学の殉教者 (Martyrer der arabischen Literatur)」²⁴というライスケの自画像を無批判に受け止めることには、先行研究において指摘されているように、慎重になる必要がある²⁵。同時代の学者たちとの交流についてライスケが書き残した回想は、たとえそれが出版に先立って推敲や編集を経ていたとしても、当の学者からの反論を招くこととなった。本導入の冒頭において言及された、ミヒャエーリスによる自己の名誉回復の試みは、まさにその典型であろう。

本翻訳は、『自伝』の内容を批判的に検討するべく、ライスケの著作や遺稿群、彼の所有した印刷物への書き込みのみならず、彼の同時代人たちの証言にも注意を払う。本翻訳はとりわけ、ライプツィヒ大学倫理学教授エック (Johann Georg Eck, 1745-1808)²⁶ やライプツィヒ大学古典語教授モールス (Samuel Friedrich Nathanael Morus, 1736-1792)²⁷ が相次いで発表したライスケの伝記のみならず、プレスラウで古典文献学を講じたりヒャルト・フェルスター (Richard Foerster, 1843-1922) が19世紀末に出版したライスケの書簡集²⁸などを用いることで、『自伝』の記述を吟味する。それにより、ライスケにかんする研究の前提となる文献を日本語で紹介するとともに、彼の学問的な仕事や彼を取り巻いた18世紀の学問の共和国 (Gelehrtenrepublik) の一端を提示することを目指す。

²⁴ Reiske, *Lebensbeschreibung*, 11. 'Ich sollte, ich mußte Leyden sehen. Darüber ließ ich alle in Händen habende Vortheile fahren. Meiner Reise nach Leyden, und dem Durste, die dortigen arabischen Manuscripte zu durchwühlen, opferte ich alle Aussichten meines künftigen Glückes auf. Das ist mir übel bekommen. Theuer, gar theuer, habe ich meine Thorheit büßen müssen! Ich bin zum Märtyrer der arabischen Literatur geworden!'

²⁵ Detlef Döring, 'Johann Jacob Reiskes Verbindungen zum wissenschaftlichen und literarischen Leben in Leipzig', in Ebert and Hanstein, eds., *Johann Jacob Reiske*, 117-140; Loop, 'Johann Jacob Reiske', 192.

²⁶ Johann Georg Eck, 'Vita Joannis Jacobi Reiskii Medicinæ Doctoris, Linguae Arabicae Professoris Publ. in Acad. Lipsiensi, Scholae Senatoriae ad D. Nicolai Rectoris, Instituti Regii Historici Goettingensis et sodalitatium litterar. Lipsiens. et Jenens. Sodalis', in Gottlieb Christoph Harless, ed., *De vitis philologorum nostra aetate, clarissimorum*, vol. 4 (Bremen: Impensis Georg. Lvdovici Foersteri, 1772), 191-214. エックがライスケの面識を得ていたことは、エックの記名帳 (Album amicorum) においてライスケが1765年7月9日付で署名していることから窺える。Weimar, Herzogin Anna Amalia Bibliothek, MS. Stb 610, fol. 48r. 'Tiberius apud Tacit. IV. 38. Cives Deumque ipsum precor, hunc, ut mihi, ad finem usque vitae, quietam & intelligentem divini humaniq[ue] jusis [s.l.: mentem] ducit, illos, ut, quandocunq[ue] concessero, vim laude et bonis reconditionibus facta atq[ue] famam nominis me prosequantur. Honoris & memoriae ergo scr. D. Jo. Jacobus Reiske Linguae Arabicae in Univ. Lips. P. P. & Scholae Senatoriae ad D. Nicolai Rector.' (<https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:gbv:32-1-10017099449>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

²⁷ Samuel Friedrich Nathanael Morus, *De vita Ioannis Jacobi Reiskii medicinae doctoris Arabicae linguae professoris in Academia Lipsiensi Scholae Nicolaitanae Lipsiensis rectoris* (Leipzig: Sumtu Gotth. Theoph. Georgi, 1777).

²⁸ Richard Foerster, ed, *Johann Jacob Reiske's Briefe* (Leipzig: S. Hirzel, 1897).

2. 翻訳

凡例

- 翻訳に際して、ミュンヘン、バイエルン州立図書館（München, Bayerische Staatsbibliothek）に、Biog. 954として所蔵されるコピーを用いる。このコピーは以下のURLにおいて閲覧可能である：<https://mdz-nbn-resolving.de/details:bsb10066131>（最終閲覧日：2025年9月12日）。
- 本コピーの書誌学的な情報は次のとおりである。
八つ折り本（octavo） [8] Bl.; 816 S.; [1] Bl.; 8²⁹
- 本書の構成は次のとおりである。
 - Sigs.) (2^v) (4^v : 献辞³⁰)
 - Sigs.) (5^v) (6^v : 本文への注釈)
 - Sigs.) (7^v) (8^v : 購入予約者一覧)
 - S. 1-145 : 『自伝』
 - S. 146-151 : 『自伝』 への補足
 - S. 152-167 : アラビア語文献にかんするライスケの遺稿一覧
 - S. 167-172 : ライスケが所有したアラビア語文献の出版物一覧
 - S. 172-175 : ギリシア語文献にかんするライスケの遺稿の一覧
 - S. 175-177 : ライスケが所有したギリシア語文献の出版物一覧
 - S. 177 : ライスケが所有したラテン語文献の出版物一覧
 - S. 178-182 : ライスケの出版物一覧
 - S. 183-816 : ライスケの書簡選集
 - S. 817-818 : 訂正表

以下の翻訳は、献辞、本文への注釈、購読者一覧、そして『自伝』本文の1～8頁を対象とする。

- 括弧類は以下の通りに用いる。
 - 〔 〕 : 訳者による補い
 - 「 」 : 原文中の強調・引用
 - () : 原文中のドイツ語やラテン語、ギリシア語テキスト
- 注釈について
訳者による注釈は、脚注においてアラビア数字によって示される。
『自伝』 それ自体にアスタリスクによって付されている注は、日本語訳本文の対応箇所に*)を付し、本文中でその翻訳が示される。

²⁹ ミュンヘン、バイエルン州立図書館 (<https://opacplus.bsb-muenchen.de/title/BV001507238>) (最終閲覧日：2025年9月25日)。

³⁰ このうち、sig.) (2^v) は空白として出版されている。

献辞〔sig.〕(2¹)

大いなる尊敬に値し学識あるお方、コペンハーゲン大学神学部教授にして駐屯兵教区の主任説教師、コペンハーゲンのデンマーク王立科学協会の構成員であり、トロンハイムのノルウェー王立科学協会の構成員であるヘルマン・トレシヨウ (Hermann Treschow)³¹氏へ。

この上なく親愛なる友へ

あなたにとある男の自伝を捧げることをお許しください。あなたはその男を追想するのに多大な貢献をなされ、叶えられなくなりつつあった彼の望みはあなたの好意あるお力添えによって満たされたのですから。

あなたは神によって請われた信頼に値する友人となり、彼にとってとりわけ気がかりであった事柄を引き受けてくださりました。あなたは、後に遺されたものに庇護を与え〔sig.〕(3¹)、諸学問に対する偉大な貢献が広く知られ、そして等しく広く尊敬されているお方の庇護におかれたのですから。

いったいどのような学者に、ズーム氏³²の名前が知られていないことがあります。私にとってこの名前はかけがえのないものです！ズーム氏は後援者以上にさらに気高く、ご自身の素晴らしい図書館の宝物を、真なる寛大さによって、存命中の学者たちに開放するだけでなく、功績をたてた者の灰にまでも敬意を払ってくださるのです。墓のなかの彼に報いてくださるのです！

付け加えて、尊き友よ、さらにそれ以上に私は何を負っていきましょう！〔sig.〕(4¹) 日々、あなたの真なる、活発な (thätig) 友情に私は改めて恩義を感じております。近頃もあなたがあれほど大きな賞賛を得ていた雄弁さによってでなければ、私はあなたにしかるべき感謝をお伝えできないでしょう。

あなたは私に、無私の、この上なく温かな友情の見本が、遠くかけ離れた時代からのみ呼び起こされるのではなく、かかる希少さ、私の心にとっての神聖なるものが今もなお見出されることを確信せしめてくださりました。

この一葉〔の手紙〕のことをどうかお忘れなきように！この頁がどうか、私の心がそれを言葉で言い表すことができないほどに感じ入る恩義の記念碑〔sig.〕(4¹) として永遠にあり続けますように！この上なく親愛なる友よ、どうかこれを、これまで私を満たして下さった親切心でもってお受け取りくださ

³¹ トレシヨウ (Herman Treschow, 1739-1797) はノルウェーのヴォーゲ (Våge) 出身の神学者である。トレシヨウの経歴につき、Bjørn Kornerup, s.v. 'Herman Treschow', in *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskleksikon.lex.dk/Herman_Treschow). 最終閲覧日：2025年9月30日。

³² デンマークの歴史家、書物蒐集家であるペーター・フレデリック・ズーム (Peter Frederik Suhm, 1728-1798) につき、H. F. Rørdam, s.v. 'Peter Frederik Suhm', *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskleksikon.lex.dk/P.F._Suhm). 最終閲覧日：2025年9月30日。

い。そしてどうか私の友であり続けてください。

深い敬意をもって

ブラウンシュヴァイクとヘルムシュテット近郊のボールムより

1783年2月12日

私は、あなたの忠実なる僕、エルネスティーネ・クリスティーネ・ライスケ

[本文への注釈] [sigs.] (5^r) (6^v)³³

私の友人の経験について〔彼〕自らが語ることが、読者にとって不快であることの無いよう私は望んでおり、それ故に私は彼の文章のほとんど全てをそのままに残し、いくつかのわずかな箇所のみを短縮した。たとえば、〔彼が〕被った不当な扱いを思い起こす際に、いくつかのあまりに強い心気症(Hypochondrie)、あるいはもはや不満があまりに強く噴出する箇所を私は削除した。

自らが著したものの全てにある種の魅力を与える術に長けていた宮廷顧問官レッシング氏³⁴がもっと長く生きて、この伝記の出版を手助けしてくださっていたら、彼はそれらをそのまま残して、しかし彼自らの加筆によって、それらの価値を二重にもしてくださっただろうに。

私の友の遺した手稿の記述は、さまざまな理由から、私がそうであってほしいと望んだほどには完全なものではない。レッシング氏もそのほんの僅かな書き出しをしたためたのみであった。また私は、彼自身の書簡も僅かしか伝えることができない。それというのも、私がその下書きを発見できたもののほとんど全ては、ご存命の学者たちに宛てられたものだからである。それどころか私はいまや、私の計画の告知(Bekanntmachung meines Vorhabens)において名前を挙げた学者たち全員の手紙を公表することができないと気づいたのである。それというのも、あるものはいまや何人も興味を示さないような依頼を含むのみであり、また別のあるものは、聴衆には宛てられていない、個人的な友情の親密さがしたためられているのみだからである。しかしそのかわり、私が名指しすることを失念してしまった人々からの大変価値ある手紙が見出されるであろう。

心に深い感動を覚えながら私はいまここに、購入予約者(Subscriber)の方々のお名前でもって、友人たちのなかでも最も誠実な者のために、彼に相応しいが〔彼は〕決して望んではいなかったこれほどまで名誉ある記念碑を建てるのである³⁵。

³³ この箇所には題目が付されておらず、「本文への注釈」という見出しを暫定的に用いている。

³⁴ ゴットホルト・エフライム・レッシングを指す。『賢者ナータン』などの劇作や『ラオコーン』といった美学・芸術論で知られるレッシングは、ブラウンシュヴァイクに程近いヴォルフエンビュッテルのアウグスト公図書館の司書であった。ライスケとレッシングの関係を知るための手がかりとして、Anonymous [Gotthold Ephraim Lessing], ed., *Gelehrter Briefwechsel zwischen D. Johann Jacob Reiske, Moses Mendelssohn, [Conrad Arnold Schmid] und Gotthold Ephraim Lessing*, 2 vols (Berlin: VoB, 1789). レッシングを頼り、エルネスティーネと共にライスケがヴォルフエンビュッテルを訪れ、同地のアラビア語写本を整理した点につき、Strohmeier, 'Johann Jacob Reiske', 208.

³⁵ Reiske, *Lebensbeschreibung*, sig.) (6^r). 'Mit innigst gerührter Seele setze ich nun hier, mit den Namen der Subscribern, dem redlichsten der Freunde, ein so ruhmvolles Monument, als er verdiente,—nie hoffte.'

最高の芸術家によって形作られた石が、これらの名前と同じくらいに功績ある者に向けられた荘厳な記念碑となることがあろうか。

地上の高位の方々（die Hohen der Erde）ご自身が善良な者の記憶を尊び、そしてまた、数多くの信頼に足る者たちの心にそれがこれほどの年月が経ってなお息づいていることを見ること以上に、抑圧された誠実な者の心を勇気づけるものは何があろうか。

〔sig.）(7^r) 購入予約者の皆さま

未亡人となられたザクセン・ヴァイマル公爵夫人殿下³⁶

現ザクセン・ヴァイマル公爵殿下³⁷

ヴァイマル：

侍従 (Kammerherr) フォン・アインジューデル様³⁸。

校長 (Director) ハイנטツェ様³⁹。

総監督 (Generalsuperintendent) ヘルダー様⁴⁰。

司書ヤーゲマン様⁴¹。

パリ、王立碑文アカデミーならびに他の数多くの学術団体の構成員であられる
ダンス・ドゥ・ヴィロアソン様⁴²。

宮廷顧問官 (Hofrath) ヴィーラント様⁴³。

コペンハーゲン：

伯爵ならびに国務大臣 (Staatsminister) フォン・トット閣下、5部⁴⁴。

伯爵ならびに国務大臣フォン・モルトケ閣下、2部⁴⁵。

³⁶ アンナ・アマリア・フォン・ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル (Anna Amalia von Braunschweig-Wolfenbüttel, 1739-1807) を指す。

³⁷ カール・アウグスト (Karl August, 1757-1828) を指す。

³⁸ フリードリヒ・ヒルデブランド・フォン・アインジューデル (Friedrich Hildebrand von Einsiedel, 1750-1828) を指す。フォン・アインジューデルにつき、Adalbert Elschenbroich, s.v. 'Friedrich Hildebrand', in Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, ed., *Neue Deutsche Biographie*, vol. 4 (Berlin: Duncker & Humblot, 1959), 401-402 (<https://www.digitale-sammlungen.de/view/bsb00016320?page=%2C1>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

³⁹ ヨーハン・ミヒャエル・ハイנטツェ (Johann Michael Heinze, 1717-1790) を指す。ハイנטツェにつき、Karl Ernst Hermann Krause, s.v. 'Heinze, Johann Michael', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 11 (1880), 664 (<https://www.deutsche-biographie.de/sfz29387.html?language=en#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁴⁰ ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) を指す。

⁴¹ クリスティアン・ヨーゼフ・ヤーゲマン (Christian Joseph Jagemann, 1735-1804) を指す。ヤーゲマンにつき、R. Köhler, s.v. 'Jagemann, Christian Joseph', in *Allgemeine Deutsche Biographie* 13 (1881), 642-643 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd100289452.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁴² ジャン・バティスト・ガスパール・ダンス・ドゥ・ヴィロアソン (Jean-Baptiste-Gaspard d'Ansse de Villoison, 1750-1805) を指す。ダンス・ドゥ・ヴィロアソンにつき、Charles Joret, *D'Ansse de Villoison et l'hellénisme en France pendant le dernier tiers du XVIIIe siècle* (Paris: Librairie Honoré Champion, 1910)。

⁴³ クリストフ・マルティン・ヴィーラント (Christoph Martin Wieland, 1733-1813) を指す。

⁴⁴ オットー・トット (Otto Thott, 1703-1785) を指す。東洋語写本の蒐集家としてのトットにつき、Stig T. Rasmussen, 'Otto Thotts orientalske håndskrifter identificeret på grundlag Det kgl. Biblioteks Arkiv E 63', *Fund og Forskning*, 37 (1998), 299-324。

⁴⁵ おそらくアーダム・ゴットロープ・モルトケ (Adam Gottlob Moltke, 1710-1792) を指す。モルト

〔sig.〕(7) 枢密顧問官グルベア閣下、4部⁴⁶。
枢密顧問官ルップドルフ (Lupdorff) 閣下⁴⁷。
侍従フォン・ズーム閣下⁴⁸。
国家顧問官 (Etatsrath) トレシヨウ様。
トレシヨウ教授、2部⁴⁹。
顧問官 (Conferenzrath) コルトセン様。
バレ教授。
ヤンソン教授。
ホルネマン教授。
ヴィル教授⁵⁰。
カル教授⁵¹。
バストホルム教授⁵²。

キール：
王立大学図書館
司法顧問官クリスティアーニ様⁵³。

ケにつき、Claus Bech, s.v. 'Adam Gottlob Moltke', in *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskeksikon.lex.dk/Adam_Gottlob_Moltke). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁴⁶ おそらくオーヴェ・ヒュー＝グルベア (Ove Høegh-Guldberg, 1731-1808) を指す。ヒュー＝グルベアにつき、Harald Jørgensen, s.v. 'Ove Høegh-Guldberg', in *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskeksikon.lex.dk/Ove_Høegh-Guldberg). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁴⁷ おそらくボレ・ヴィルム・ルクスドルフ (Bolle Willum Luxdorff, 1716-1788) を指す。ルクスドルフの生涯につき、C. Molbeck, *Det kongelige danske videnskabernes selskabs historie i dens første aarhundrede 1742-1842* (Copenhagen: Jens Hostrup Schultz, 1843), 269, n. 260.

⁴⁸ ペーター・フレデリック・ズーム (Peter Frederik Suhm, 1728-1798) を指す。ズームにつき、上掲註33を参照。

⁴⁹ ヘルマン・トレシヨウ (Herman Treschow, 1739-1797) を指す。トレシヨウにつき、上掲註32を参照。

⁵⁰ おそらくアンドレアス・クリスティアン・ヴィル (Andreas Christian Hviid, 1749-1788) を指す。ヴィルにつき、Bjørn Kornerup, s.v. 'Andreas Christian Hviid', in *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskeksikon.lex.dk/Andreas_Christian_Hviid). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁵¹ アブラハム・カル (Abraham Kall, 1743-1821) を指す。カルにつき、Erik Lund Jensen, s.v. 'Abraham Kall', in *Dansk Biografisk Leksikon* (https://biografiskeksikon.lex.dk/Abraham_Kall). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁵² おそらくクリスティアン・バストホルム (Christian Bastholm, 1740-1818) を指す。バストホルムにつき、A. G. Rudelbach, s.v. 'Dänische Literatur und Sprache', in Johann Samuel Gruber, ed., *Allgemeine Encyclopädie der Wissenschaften und Künste*, 1. Section A-G. (Leipzig: F. A. Brockhaus, 1837), 44b-101b (91a).

⁵³ ヴィルヘルム・エルンスト・クリスティアーニ (Wilhelm Ernst Christiani, 1731-1793) を指す。クリスティアーニにつき、Henning Ratjen, s.v. 'Christiani, Wilhelm Ernst', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 4 (1876), 214-216 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd137848439.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

司法顧問官ヒルシュフェルト様。
エーラーズ教授⁵⁴。
テーテンス教授⁵⁵。
エッカーマン教授⁵⁶。
マイアー教授⁵⁷。
ヴェーバー教授。
校長代理 (Conrector) ランゲ様。
フォン・ヴァルモーデン様。
宮廷顧問官 (Hofmeister) カイザー様。
副宰相 (Prokanzler) クラーマー様。
教会顧問 (Kirchenrath) バイザー様。
メルマン教授⁵⁸。
クラーマー教授⁵⁹。
アルトナ、宮廷顧問官ガスパーリ様。
プレーツの説教師図書館。
[sig.)(8] キール、ハインツェ教授、3部。

ヘルムシュテット：⁶⁰

宮廷顧問官ヴェルンスドルフ様。
ボーデ教授⁶¹。
ブルンズ教授。
ヴィーデブルク教授⁶²。

⁵⁴ おそらくマルティン・エーラーズ (Martin Ehlers, 1732-1800) を指す。以下、キール大学の教授を特定する際に、訳者は Friedrich Volbehr, *Professoren und Dozenten der Christian-Albrechts-Universität zu Kiel 1665 bis 1887* (Kiel: Verlag der Universitäts-Buchhandlung, 1887) を参照した。エーラーズにつき、ibid., 58.

⁵⁵ ヨーハン・ニコラウス・テーテンス (Johann Nicolaus Tetens, 1736-1807) を指す。テーテンスにつき、Volbehr, *Professoren und Dozenten*, 58.

⁵⁶ ヤーコプ・クリストフ・ルドルフ・エッカーマン (Jakob Christoph Rudolf Eckermann, 1754-1837) を指す。エッカーマンにつき、Volbehr, *Professoren und Dozenten*, 9.

⁵⁷ ヨーハン・ヘルマン・マイアー (Johann Hermann Meyer, 1737-1795) を指す。マイアーにつき、Volbehr, *Professoren und Dozenten*, 14.

⁵⁸ ヨーハン・ディートリヒ・メルマン (Johann Dietrich Mellmann, 1746-1801) を指す。メルマンにつき、Volbehr, *Professoren und Dozenten*, 24.

⁵⁹ おそらくキール大学でギリシア語と東洋諸語を講じたカール・フリードリヒ・クラーマー (Karl Friedrich Cramer, 1752-1808) を指す。クラーマーにつき、Volbehr, *Professoren und Dozenten*, 58.

⁶⁰ ヘルムシュテット大学の教授を特定するにあたり訳者は、「ヘルムシュテット大学における知の創出 (Wissensproduktion an der Universität Helmstedt)」プロジェクトのデータベースを用いた (<http://uni-helmstedt.hab.de/index.php?cPage=0&Page=title>)。最終閲覧日：2025年9月30日。

⁶¹ クリストフ・アウグスト・ボーデ (Christoph August Bode, 1722-1796) を指す。

⁶² フリードリヒ・アウグスト・ヴィーデブルク (Friedrich August Wiedeberg, 1751-1815) を指

ゲディケ様。
プレース様。
リーバウ様。

ライプツィヒ：

トーマス教会、首席司祭 (Archidiaconus) シャルフ氏。
ギリシア語・ラテン語公認教授、フリードリヒ・ヴォルフガング・ライツ様⁶³。
クラウジンク教授。
エック教授、2部⁶⁴。
シャルフェンベルク教授。
ヴェンドラー様。

ドレスデン：

枢密軍務官 (Geheimdekreth) フォン・ポーニカウ様⁶⁵。
総監督レーコプフ博士⁶⁶。
聖アンネ校の学長ハイマン様⁶⁷。
宮廷秘書官 (Kammersecretair) グルンディヒ様。
宮廷秘書官アッカーマン様。

す。ヴィーデブルクにつき、W. Stalmann and Friedrich Koldewey, s.v. 'Wiedeburg, Friedrich August' in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 42 (1897), 376-379 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd120229862.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁶³ フリードリヒ・ヴォルフガング・ライツ (Friedrich Wolfgang Reiz, 1733-1790) を指す。ライツにつき、Richard Hoche, s.v. 'Reiz, Friedrich Wolfgang', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 28 (1889), 178 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd116433132.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁶⁴ ライプツィヒ大学倫理学教授ヨーハン・ゲオルク・エック (Johann Georg Eck, 1745-1808) を指す。エックにつき、上掲注26を参照。

⁶⁵ おそらくヨーハン・アウグスト・フォン・ポーニカウ (Johann August von Ponickau, 1718-1802) を指す。フォン・ポーニカウにつき、O. Hg., s.v. 'Ponickau, Johann August von', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 26 (1888), 410-411 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd104208082.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁶⁶ ヨーハン・フリードリヒ・レーコプフ (Johann Friedrich Rehkopf, 1733-1789) を指す。レーコプフとライスケの関係につき、Boris Liebrecht, 'Johann Jacob Reiskes arabistische Schüler', in Hans-Georg Ebert und Thoralf Hanstein, eds., *Heinrich Lebrecht Fleischer—Leben und Wirkung: Ein Leipziger Orientalist des 19. Jahrhunderts mit internationaler Ausstrahlung* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013), 169-196 (180-183)。

⁶⁷ クリストフ・ヨーハン・ゴットフリート・ハイマン (Christoph Johann Gottfried Haymann, 1738-1816) を指す。ハイマンにつき差し当たり、Johann Gottlieb August Kläbe, *Neuestes gelehrtes Dresden oder Nachrichten von jetzt lebenden Dresdner Gelehrten, Schriftstellern, Künstlern, Bibliotheken- und Kunstsammlern* (Leipzig: Voss und Comp., 1796), 58-60。

[sig.)(8^v) さらに：

ヴェッテンベルク教区総監督 (Generalsuperintendent) ヒルト様、10部⁶⁸。

ゴータ、枢密宮廷顧問官シュレーガー様、4部⁶⁹。

ゲッティンゲン、顧問官ハイネ様、4部。

アムステルダム の書籍業者、ペーター・デン・ヘンフスト (Peter den Hengst) 様、20部。

ハレ、ニーマイアー教授、6部⁷⁰。

テュービンゲン、シュヌーラー教授、4部⁷¹。

リュエネブルク、ニクラス学長⁷²。

宮廷顧問官エーベルト様ならびに

ブラウンシュヴァイク、エッセンブルク教授⁷³。

⁶⁸ 聖書学者・東洋学者ヨーハン・フリードリヒ・ヒルト (Johann Friedrich Hirt, 1719-1783) を指す。ヒルトの著作のひとつに『アラビア語文法』(1770) が挙げられる。ヒルトの『アラビア語文法』は、ライスケによって編集・ラテン語へと翻訳された、後ウマイヤ朝の政治家・文筆家イブン・ザイドゥーン (Ibn Zaydūn, 1003-1071) の『書簡 (Risāla)』を再録し、イブン・ヌバータ (Ġamāl al-Dīn Muḥammad b. Muḥammad Ibn Nubāta al-Miṣrī, d. 768/1366) による注釈 (*Kitāb Sarḥ al-ʿuyūn fī sarḥ risālat Ibn Zaydūn*) を収録している。Johann Jacob Reiske, ed. and tr., *Abi'l Walidi Ibn Zeidvni Risalet sev Epistolivm* (Leipzig: Officina Gleditschiana, 1755); Johann Friedrich Hirt, *Institutiones Arabicae linguae. Adiecta est Chrestomathia Arabica* (Jena: Apud viduam Croeckerianam, 1770), 483-536. ヒルトがイブン・ヌバータの注釈のアラビア語テキストをライスケから入手した経緯につき、Hirt, *Institutiones Arabicae linguae*, 483-484. 'Totum hoc, quod iam sequitur, specimen *Ebn Saiduni Resalet* exhibens, debemus celeberrimo Lipsiensium philologo, IO. IACOBO REISKIO, viro in arabicis aequae ac graecis litteris versatissimo, cuius cura illud Lipsiae in officina gleditschiana 1755. 3. plagul. in 4. prodiit, sub tit. *Abi'l Walidi Ibn Zeidvni Risalet seu Epistolium arabice et latine cum notulis edidit I. I. Reiske*. Quumque paulo abhinc tempore litteris meis ad virum laudatum missis ex eo quaererem, an permissu illius fieri queat, vt libellus hic, qui, teste ipso Reiskio doctissimo, lepidus scitusque, et tam salibus, quam dictionis elegantia et floribus est commendabilis, Chrestomathiae meae arabicae insereretur; non solum benevole consensus, sed simul pro amicitia sua ac humanitate singulari specimen Commentarii *Ebn Nobatah ad Resalet Ebn Saiduni* ad me misit, quod huic libello mox sub littera D. adicietur.'

⁶⁹ ユリウス・カール・シュレーガー (Julius Karl Schläger, 1706-1786) を指す。シュレーガーにつき、A. Schumann, s.v. 'Schläger, Julius Karl', *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 31 (1890), 327-329 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd10422665X.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁷⁰ おそらくアウグスト・ヘルマン・ニーマイアー (August Hermann Niemeyer, 1754-1828) を指す。ニーマイアーにつき差し当たり、August Jacobs and J. G. Gruber, *August Hermann Niemeyer. Zur Erinnerung an dessen Leben und Wirken* (Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses, 1831).

⁷¹ クリステリアーン・フリードリヒ・フォン・シュヌーラー (Christian Friedrich von Schnurrer, 1742-1822) を指す。シュヌーラーとライスケの関係につき、Liebrenz, 'Johann Jacob Reiskes arabistische Schüler', 187-188. シュヌーラーの主著のひとつである『アラビア語全書』は、初期近代以降にヨーロッパにおいて出版されたアラビア語印刷物を知るための必須の手引きである。Christian Friedrich von Schnurrer, *Bibliotheca Arabica* (Halle: Typis et sumtu I. C. Hendelii, 1811).

⁷² ユーハン・ニコラウス・ニクラス (Johann Nicolaus Niclas, 1733-1808) を指す。ニクラスにつき、Krause, s.v. 'Niclas, Johann Nicolaus', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 23 (1886), 574-575 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd116995173.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁷³ ユーハン・ヨアヒム・エッセンブルク (Johann Joachim Eschenburg, 1743-1820) を指す。エッ

ヴォルフエンビュッテル、ランガー司書⁷⁴。

ストラスブール、ブレスィヒ教授、30部⁷⁵。

ケーニヒスベルク、ケーラー教授、3部⁷⁶。

ベルリンの書籍取次業者、ニコライ様、12部⁷⁷。

イエナ、アイヒホルン教授、5部⁷⁸。

ダンツィヒの候補生ヴェルンスドルフ様。

ライプツィヒ、学者たちの書籍取次業者（Buchhandlung der Gelehrten）、十二名の匿名の購入予約者の皆さま。

さらに七名の匿名の購入予約者の皆さま。

シエンブルクにつき、Fritz Meyen, s.v. 'Eschenburg, Johann Joachim', in *Neue Deutsche Biographie*, vol. 4 (1959), 642-643 (<https://www.deutsche-biographie.de/sfzl13714.html#ndbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

⁷⁴ エルンスト・テオドル・ランガー (Ernst Theodor Langer, 1743-1820) を指す。ランガーにつき、Otto von Heinemann, *Die Herzogliche Bibliothek zu Wolfenbüttel: Ein Beitrag zur Geschichte deutscher Büchersammlungen*, 2. völlige neugearbeitete Aufl. (Wolfenbüttel: Julius Zwißler, 1894), 189-211.

⁷⁵ ヨーハン・ローレンツ・ブレスィヒ (Johann Lorenz Blessig, 1747-1816) を指す。ブレスィヒとライスケの関係につき、Liebrenz, 'Johann Jacob Reiskes arabistische Schüler', 191-192.

⁷⁶ ヨーハン・ベルンハルト・ケーラー (Johann Bernhard Köhler, 1742-1802) を指す。ケーラーとライスケの関係につき、Liebrenz, 'Johann Jacob Reiskes arabistische Schüler', 183-184. ケーラーの生涯と仕事は、それ自体として研究対象となり得るように思われる。ライプツィヒにおいてライスケとアラビア語を学んだケーラーは、1766年にアブル・フィダー (Abū al-Fidā', d. 732/1331) の『諸国図 (*Taqwīm al-buldān*)』からの抜粋のアラビア語テキストとラテン語訳を出版したことで知られている。Johann Bernard Köhler, ed. and tr., *Abulfedae Tabula Syriae, cum excerpto geographico ex Ibn al Wardii Geographia et Historia Naturali* (Leipzig: Apud Gottlieb Lebr. Hartungium, 1766). ケーラーの遺稿—その多くはこんにちゲッティンゲン、ニーダーザクセン州立・大学図書館に所蔵されている—は、彼がライスケの手稿類を用いることができたことを示唆している。例えばケーラーは、ライスケの手になるイブン・クタイバ (Ibn Qutayba, d. 276/889) の『知識 (*Ma'ārif*)』のラテン語訳を筆写している。この手稿はこんにち Basel, Universitätsbibliothek (henceforth: BUB), M II 18 として保管されている。他方、ライスケもまたライデン大学図書館に Or. 728 として所蔵される写本に基づいて、『知識』のアラビア語テキストを筆写し (KKB, Cod. Arab. 116)、そのラテン語訳を作成している (KKB, KPS. 15)。BUB, M II 18 と KKB, KPS. 15 の題目 (いずれもフォリオ番号は割り振られていない) は次のとおりである：'Ibn Kotaibah Ketab al Ma'ārefi fi Achbari 'l 'Ārabi wa Ansalihem seu Notitiae et Origines virorum apud Arabes ante Haġrano (vel Emigrationem et fugam Muhammedis) et potissimum per tria post eam saecula pietate, eruditione et armis illustrium interprete Jo. Jacobo Reiske, M. D. Hujus libri interpretatio si quae alia mihi valde difficilis accidit, neque adhuc dum mihi satisfacit. Multa insunt minus Latina. Permulta, quae his uncinis [] inclusi, debui addere, integrandi sensus gratia. Faciat meliorem, qui potest. Sed vix erit qui possit. Institui Sorbigae versionem d. 15 Sept. 1746.' パーゼル大学図書館とデンマーク王立図書館に所蔵される『知識』のラテン語訳手稿の題目の一致は、ケーラーがライスケのアラビア語写本コレクションやラテン語訳、その他の成果をどの程度まで用いることができたのか、という疑問を惹起する。

⁷⁷ フリードリヒ・ニコライ (Friedrich Nicolai, 1733-1811) を指す。ニコライにつき、戸叶勝也『ドイツ啓蒙主義の巨人 フリードリヒ・ニコライ』(朝文社、2000年)。

⁷⁸ 聖書学者・東洋学者ヨーハン・ゴットフリート・アイヒホルン (Johann Gottfried Eichhorn, 1752-1827) を指す。アイヒホルンにつき差し当たり、Fück, *Die arabischen Studien*, 160 (=フェック著、井村訳『アラブ・イスラム研究誌』、133頁)。

『自伝』本文

私は自身の生涯を記すべきであると言われていた。そうするように幾度か請われたとはいえ、そうする気などさらさらなかったのであるが。

全くもって私は普通の男である。なんら特別なことも成し遂げていない。特に注目を集めたこともない。人気で引っ張りだこの、流行りに乗った書き手になることもなかった。私は名声あふれるような名誉ある地位を占めることもなかった。私の生涯は、あるときは惨めな貧困のなかで、あるときは誰にも知られることのない静けさのなかで流れ去っていった。自分の著作によって、私は何ら偉大なことも達成しなかった。いつだって私の意志は能力を上回っていた。

なるほど、学者は他の者より自分の生涯を記述するのにずっと長けているようにも思われる。いくつかの点において私もそう認めよう。だが多くの点で、見知らぬ者の方が当人よりずっと優位である。各々が最もよく知っているはずの多くの事柄についてさえ、時間の長さは認識の明瞭さを曇らせてしまう。自己愛が邪魔をする。それは偽り、欺くのである。彼〔学者〕は自身への賞賛をさえ口にしてはならないのだ。それが彼の筆になるものであるという理由で、たとえそれが真実であろうとも、誰も彼のことを信じなくなってしまうかもしれない。さらにその誤りを自分で暴き出すことは、彼の責務ではない〔S. 2〕。皆に備わっている自己愛は、かくも謙虚な自己否定からあらゆる人々を解放するのである。

これこそ、その時々私に自伝を書くようにせがんできた友人たちの意に従うことから私を遠ざけてきた原因なのである。虚栄心が私を悩ませるわけではない。よしんば私がたいへんに有名であるとしよう。その名声はどれだけ長く続くのであろう。私が扱ってきた古代の著者たちと同じくらい長い年月を想定してみるがよい。私はそれ以上のものを望むべくもない！私がいまだ存在していなかったがために人々が私について何一つ知らなかった時間、そして私の名前の痕跡がなにも残らなくなる時間に比べれば、それはなんと短い期間であろうか。そしてこれはきっといつかやって来るではないか。よしんば、私の名前が仮に世界の終わるときまで残るとしよう。それが私にとって何の役に立つというのか。長い間、私は知られている。それも称賛とともに、である。しかしそれにもかかわらず私は貧しく、軽蔑され、まさに極貧であったのである。私の名声ではなく一然り、名声ではないのだ一、不思議な神の摂理 (Schickung) こそ、長年にわたる病 (Süchten)⁷⁹ののちに、破滅の淵にあった私を今の境遇へとついに置いてくださったのだ。

⁷⁹ Reiske, *Lebensbeschreibung*, 817. 'Seite 2. Zeile 11 von unten, statt: langem Suchen, lies langen Süchten.'

要するに、名声を求めることが、自分の生涯を記すように私を突き動かしたのではないのである。そうではなくて、友人たちが絶え間なく強要してきたこと (das anhaltende Nöthigen) によるのである。長くは、私は彼らの頼みに逆らうことができないのである。しかし私は、うわべだけの、不完全な報告以上のものしか約束できない。実際、どのようにして、これが別様のものとなるだろうか。私が体験したことの多くは、長きにわたる時間を通じて、私から抜け落ちてしまった。私はそれを気にもとめなかった。[S. 3] 私の著作のなかに、私の生涯の本質的なものが存在している。その内、私が明るみに出すことができたのはいかに少ないことか！そのほとんどのものは、私とともにすべての人間のたどる道をたどる⁸⁰。なぜなら、それは私の頭に芽生えるものなのだから。私が永眠すれば、それもまた永眠してしまう。私の書類の運命にはさまざまなこと (manches) が待ち受けている。そしてついに、偶然にも印刷を通じて世に出版された数少ないもののうち、ああ、私の名前が最初に載せられていない瑣末なものがどれほど多いことか。これらが、『学識者たちの活動 (Acta Eruditorum)』や信頼に足る報告、その他の雑誌のいずれに掲載されたのか、私自身ももはやわからない。それが私の仕事であるか、他の者の仕事であるか、私は確信をもって断言することはできないのである。家政においてと同様に、学問においても、パンくず (Gebröse) は必要なのだ。犬や猫、雀 (Sperlinge) も生きなければならない。「それを鳥たちや犬たちにとっての餌食とせん (Οἰωνοῖσι κύνεσσι θ' ἐλώρια ταῦτα γενέσθω)」⁸¹。

私は1716年12月25日に生まれた。しかしながら私はずっと、自分が一年後に生まれたものと考えていた。そうした思い込みから、私はまた『ライプツィヒにあるニコライ学校の歴史について (de temporibus Scholae Nicolaitanae, quae Lipsiae est)』という小作品において、自分の誕生日を1717年12月25日としてしまった⁸²。しかしその後、ツェルビヒの教会記録簿を見ることで、私の誤りを知ることができた⁸³。何年か前のことであるが、私は偶然にもこの教会記録簿

⁸⁰ Reiske, *Lebensbeschreibung*, 3. 'Das meiste geht mit mir den Weg alles Fleisches.'

⁸¹ ホメロス『イリアス』の冒頭の一節の仄めかしであると考えられる。Homer, *The Ilias*. With an English Translation by A. T. Murray (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1978), 2, ll. 1-5 (Greek text). 'Μῆνιν ἄειδε, θεά, Πηληϊάδεω Ἀχιλῆος οὐλομένην, ἣ μυρὶ Ἀχαιοῖς ἄλγε' ἔθηκε, πολλὰς δ' ἰφθίμους ψυχὰς Ἄϊδι προΐαψεν ἠρώων, αὐτοὺς δὲ ἐλώρια τεύχε κύνεσσιν οἰωνοῖσι τε πάσι, ...'; 3, ll. 1-5 (English translation). 'The wrath do thou sing, O goddess, of Peleus' son, Achilles, that baneful wrath which brought countless woes upon valiant souls of warriors, and made themselves to be a spoil for dogs and all manner of birds; ...'.

⁸² Johann Jacob Reiske, *De rebus ad scholam civicam quae Lipsiae ad D. Nicolai est, pertinentibus expositio* (Leipzig: Ex Officina Langenhemia, 1759), 28. 'XXVI. D. Io. Iacobus Reiske, natus Sorbigeae d. 25. Dec. 1717. absolutis Leidae in Batau studio academico, ubi summos in medicina honores adeptus est, A. 1748. in Acad. Lipsiense constitutus est professor linguae Arabicae, A. 1758. d. 1. Iulii huic scholae praefectus.'

⁸³ Reiske, *Lebensbeschreibung*, 3. 'Allein, das Kirchenbuch zu Zörbig hat mich hernach eines bessern

を調べる羽目になったのである。私が生まれたツェルビヒは、ライプツィヒ郡の片田舎にあるアンハルトとの境の、ライプツィヒからハンブルクへ、そしてハレからベルリンへの道が交差する地点に位置する小さな町である。私の父は皮なめし職人であり、ヨーハン・バルタザールという名であった。父側の家系について私は、自分の祖父がオスターラントのランツベルク近郊のジーチュ(Sietsch)という村で宿屋の主人をしていたことしか知らない*)。私の母はアンナ・クリスティーナ・クローシンという名であった。私の両親は、私をツェルビヒの市立学校に10歳まで通わせた。それから彼らは私を母方の祖父のもとに預けた。祖父は、ライプツィヒからメルゼブルクへ向かう途上にある緑地であるツェッシェン(Zöschen)という村の学校教員(Schulmeister)であった。この村において、牧師であり、修士号を持っていたメールタウ氏(M[agister]. Mehltau)は自身の息子のためにある家庭教師(Informator)を抱えており、彼は私も1日に二時間、この教師の授業を受けることを認めてくださったのである。

*) 家系にかんする古い報告によれば、この宿屋の主人の父親はボヘミアの出身であり、三十年戦争においてザクセン選帝侯軍の士官であったそうだ。そしてその後、ジーチュの宿屋の娘と結婚したとされる。こんにちボヘミアではいまだに、ちょうど、彼が書いたように、ライスキー氏(von Reisky)が存在する。

この教師、マイスナー氏(M[agister]. Meißner)は、現在ドレスデンの聖十字架学校(Creuzschule)の第四教授(Collega quartus)である⁸⁴。彼は私にいつもたくさん愛情を示してくださった。彼の愛情に神が報いてくださいますように。私の手になるキケロの『トゥスクルム荘対談集(*Tusculanis Ciceronis*)』への注釈—ここ〔ライプツィヒ〕で1760年頃に印刷された—を彼に捧げることで、私は自身の感謝の数少ない記念碑を建てた⁸⁵。彼は、ご自身の出身地であるエルツ山地のアルテンベルク〔S. 5〕についての報告⁸⁶やその他の小論を通

belehrt ...'

⁸⁴ クリストフ・マイスナー(Christoph Meißner, d. 1780)を指す。マイスナーにつき、Michael Wetzel, s.v. 'Christoph Meißner', in Institut für Sächsische Geschichte und Volkskunde, ed. Sächsische Biografie (<https://saebi.isgv.de/biografie/29093>). 最終閲覧日: 2025年9月30日。

⁸⁵ Anonymous [Johann Jacob Reiske], ed., *M. Tullii Ciceronis Tusculanarum Quaestionum libro V. Accedit libellus variantium lectionum* (Leipzig: Loepervs, 1759)。本翻訳の訳者は、ニーダーザクセン州立・大学図書館に8 AUCT LAT II, 2793として所蔵されるコピーを参照した。このコピーは、以下のURLにおいて閲覧可能である: <http://resolver.sub.uni-goettingen.de/purl?PPN870041053>(最終閲覧日: 2025年9月30日)。マイスナーへの献呈は、Reiske, ed., *M. Tullii Ciceronis Tusculanarum*, 307。

⁸⁶ Christoph Meissner, *Umsändliche Nachricht von der Churf. Sächß. Schriftsäßigen freyen Zien=Berg=Stadt Altenberg, in Meissen an der Böhmischen Gränze gelegen: nebst dahingehöri gen Diplomatus, und einem*

じて有名になられた。この誠実なお方は、私を1年間にわたって、コルネリウス〔・キケロ〕にかなりの程度触れさせ、四福音書をギリシア語でほとんど理解し、分析できるようにしてくださった。しかしかの牧師〔メールタウ〕が彼を免職したが故に、そして彼が再びライプツィヒへと戻ったが故に、私はそこ〔ジーチュ〕から連れ出され、ハレの孤児院（Waysenhaus）へと送られた。そこに私は、1728年から1732年までおよそ5年間滞在した。

当時私は、いく人もの優れた教師を得た。とりわけ、故バウムガルテン博士（D. Baumgarten）である⁸⁷。彼の弟であり、のちにベルリンにおいて監督教区長（Propst）として亡くなったナタネール（Nathanael）と⁸⁸、いままご存命のゲッティンゲンの宮廷顧問官ミヒャエーリス氏（Herr Hofrath Michaelis）が、私の学友であった⁸⁹。私たち三人は、たいいて同じクラスであった。この学校から私は、ラテン語の優れた基礎（einen guten Grund）を身につけることができたが、しかしそれ以外のものをそれほど得ることはなかった。それは私の責任であり、学校の責任ではない。その環境（Einrichtung）は、教育方法にかんしていえば、優れたものである。もっともその躰（Zucht）は皆のためのものではないとはいえ。少なくとも、それは私と同様の者たちのためのものではなかった。ごく幼いころから私は病弱であり、悲しげであり、悄然として、人見知りをし、心気症気味であった*）。そうした人々にとって、〔S. 6〕修道院の規律によって事態はさらに悪くなる⁹⁰。彼らの一生涯にわたって、彼らには臆病で内気な子どもに対する躰の傷跡が残ったままになる。そうした早すぎる傷を彼らは決して癒すことができない。躰の厳しさは、正反対の、自由で明るい気質の人々にとっても危険でさえある。なぜなら、彼らが慣れ親しんでいない学問の生活の自由さにひとたび入るやいなや、彼らは排除されてしまうのだから。

*）彼の母は7年間にわたって鬱の状態（schwermüthig）であった。そのような状態で彼女は、早逝した他の子どもたちとならんで、彼を産んだ。悲哀への傾

Anhänge, von den benachbarten Städten und Berg=Dertern (Dresden and Leipzig: J. W. Harpeters Buchhandlung, 1747).

⁸⁷ ジークムント・ヤーコプ・バウムガルテン（Siegmund Jakob Baumgarten, 1706-1754）を指す。ジークムント・バウムガルテンにつき、David Sorkin, 'Reclaiming Theology for the Enlightenment: The Case of Siegmund Jacob Baumgarten (1706-1757)', *Central European History* 36/4 (2003), 503-530; Philippe Bernhard Schmid, 'The Student as Broker: Friedrich Wilhelm Roloff and the Translation of Early Modern Biblical Scholarship', *Erudition and the Republic of Letters* 8 (2023), 36-78.

⁸⁸ ナタネール・バウムガルテン（Nathanael Baumgarten, 1716-1762）を指す。ナタネールの略歴につき差し当たり、https://ARCHIV.FRANCKE-HALLE.DE/objekt_start.fau?prj=ifaust8_afst&dm=Archiv&ref=132998（最終閲覧日：2025年9月29日）。

⁸⁹ ヨーハン・ダーフィト・ミヒャエーリス（Johann David Michaelis, 1717-1791）を指す。ミヒャエーリスにつき、上掲注1を参照。

⁹⁰ Reiske, *Lebensbeschreibung*, 5-6. 'Mit solchen Leuten wird es bey einer Klosterzucht noch schlimmer.'

向は、それ故に、生まれと同時に彼に備わっていたのである。さらに父親によって、その教育を母親にまったく委ねられた彼は、彼女の風変わりな思いつきによってしばしば苛まれ、そして彼の健康に支障をきたした。ときに彼は眼が悪くなり、ときに首に不調をかかえることとなった。そして彼女は、彼に何ひとつ悪いところがないよう、彼に治療を施した。こうして彼にとっての人生は、さもなければ楽しげな最初の子どもの時代において、惨めなものとしたのである。

かつての自分の教師たちのなかで、私は特に称賛によって励ましてくださった方を好いていた。それはかの善良なヴェンク氏 (M. Wenk) であった。彼は数年前にダームシュタットのギムナジウムの校長 (Director) を務めていた際に亡くなられた⁹¹。

この学校で私は二重の困難 (Klippe) に遭遇した。第一の困難はこれである。すなわち、すべての学校において、教師たちが適切に選ばれるのは稀なことである。彼らの職務にふさわしい者は極めて少ない。[S. 7] そしてハレでは、ほとんどすべての授業時間ごとに、そして半年ごとに、別の新しい教員 (Præceptores) が入れ替わるという仕組みになっていた。それ故に私はハレにおいて、学者 (Literator) でも真の学校教員でもない教師たちのあいだにいるという不幸に見舞われたのである。彼らは私にキケロを正しく披露することができなかった。私は、自分が理解できず、また誰も私に解説してくれない古代のラテン語を用いた著者たちに吐き気をいだくほどであった。悪例は私をムレートゥス (Muretus) やブーヒナー (Buchner)、クネーウス (Cunäus) やツェラリウス (Cellarius) へと導いた。私はこれら〔の著者たち〕を熱心に読んだ。なぜなら、私は彼らをより容易に理解できたからである。それは私にとって災いであった。たしかに私は、より新しいラテン語の書き手たちから、かなりのラテン語文法を身につけることができたので、私はラテン語を達者に話し、書くことができるようになった。じっさい、良きラテン語を知る者たちは、私のラテン語を見事なものと看做した。しかし、古代の真の著者たちの優れたラテン語を知ることができたのは、私が40歳代になってのことであった。放置していたものを再び取り戻すには、それはあまりに遅すぎたのだ。その当時私は初めてキケロについての知識を身につけようとし始めた。だが彼からその味わいを得るには遅すぎたのである。

なるほど、私の書くラテン語や古代の良きラテン語の知識と、この分野にお

⁹¹ ヴェンクが「数年前に」亡くなったとするライスケに従うと、おそらくヨーハン・マルティン・ヴェンク (Johann Martin Wenck, 1704-1761) を指すと考えられる。ヴェンクにつき、Karl Wenck, s.v. 'Wenck, Johann Martin', in *Allgemeine Deutsche Biographie*, vol. 41 (1896), 709-710 (<https://www.deutsche-biographie.de/pnd124222420.html#adbcontent>). 最終閲覧日：2025年9月30日。

いてわれわれの学校教員たちが一般的に備えている熟練度との隔たりについては、人々が私に言うに及ばない。しかし私は、大抵の学校教員たちのラテン語らしからぬ、俗悪でわかりにくいドイツ語風ラテン語 (Deutschlatein) を大変に軽蔑していた。それを嫌悪感と不快感とをもって軽蔑していたのと同じくらい、[S. 8] 私自身のラテン語をかのかケロと比べると、私は不愉快な気持ちになるのである。ああ、私は子どものようになんと呂律のまわらないことか！

私がハレにおいて躓いた第二の躓きの石とは、次のようなものであった。私が12歳のとき、眼前で執り行われるのを見聞きし、好奇心や子どもながらに真似をしたいという欲、そして強制されて参加した礼拝の時間によって、私は愚か者となってしまった。私は礼拝狂い (Betnarr) となった。私は何時間でも (zu ganzen Stunden) 心から祈ることができた。いまや私は、自分の心を十五分でさえ神を前で打ち明けることが難しいことに気がついたのである。だが熱はすぐに冷めてしまった。私は世に生まれ、要するに自然主義者 (Naturalist) と大差ないものになってしまったのである⁹²。こうした、一方の極から他方の極への、これほど大きな隔たりをまたいだ、あまりに広い飛躍から、私はいまだ適切に回復できていないのである。

私はハレを去る。私はそのことを常に喜びと感謝をもって思い起こしている。それを心のなかで祝福しているのだ。

⁹² Reiske, *Lebensbeschreibung*, 8. 'ich kam in die Welt, kurz, ich ward nicht viel besser, als ein Naturalist.' Loop, 'Johann Jacob Reiske', 198はこの箇所を参照しつつ、幼少期のライスケがハレにおける敬虔主義の旗手であったアウグスト・ヘルマン・フランケ (August Hermann Francke, 1663-1727) によって設立された孤児院に通ったこと、しかし敬虔主義的な教育にもかかわらず、その後のライスケが宗教的な事柄に大きな関心をいだかなかったことを強調する。